

教育委員会

コラム Vol.21

教育長室の窓から

校訓「愛情」「忍耐」「責任」



「自分の心が揺さぶられるほど相手のことを気かけ、大切に思う」(愛情)

「将来の目標達成のため、あるいは困難な状況を乗り越えるために、辛抱強く耐え抜く」(忍耐)

「自分に与えられた役割などを自覚し、それを誠実に果たし、そして自分の行動やその結果について責任を負う」(責任)

これは、高山准看護学校で学んだ皆さんが身に付け、引き継がれている校訓です。本校は、昭和43年に1期生を迎えて以来、令和6年の57期生の入学までに多くの卒業生を輩出し、大隅地区はじめ日本の医療・福祉に貢献しております。最後の卒業生となる57期生10名も、令和8年3月5日、本校を巣立ちます。

ところで、関東から北海道の東日本・北日本では、江戸時代後期に、二宮尊徳(二宮金次郎)が提唱した報徳仕法が行われた地域が多く、現在も市町村の行政や学校教育に取り入れられています。(鹿児島県内でも、小学校を中心に二宮金次郎の銅像があります。)なぜ、二宮尊徳に触れたかと言うと、本校の校訓である「愛情」「忍耐」「責任」は、報徳仕法の基本となる徳目(教え)と軌一であり、本校の教育目標にも通じるからです。だからこそ、准看護師としての知識や技術はもちろんですが、豊かな感性や人間性を身に付け、調和のとれた医療従事者として、全国で活躍できる人材が本校から育ったと思います。

ちなみに、4つの徳目(教え)は次の通りです。57期生の皆さんはじめ、本校を巣立った皆さん、医療現場や社会生活、家庭生活の中などでの行動の規範にさせていただきたいと思います。

「至誠」まごころを尽くすこと。全てにおいて誠実であることが報徳仕法の根本です。「勤労」心身を労して懸命に働くこと。社会に役立つ成果を考えながら働くことが大切です。「分度」自分の経済的な状況や立場に見合った生活の限度を決めて生活すること。「推譲」勤労と分度によって生まれた余剰を、将来の貯蓄(自讓)や他人・社会のために譲る(他讓)こと。

あらためて本校の校訓「愛情」「忍耐」「責任」、校歌の一節「あゝ白衣 誠 かがやく」「あゝ白衣 使命けだかし」に立ち返り、高山准看護学校での日々に想いを寄せていただければ幸いです。高山准看護学校は「明日また行きたい学び舎」、そこに集う人々にとって「生き生きと輝く学び舎」として心の中に生き続けます。

(肝付町立高山准看護学校閉校記念誌より校長挨拶)

教育長の

ちょっといい話

仲間との日々

～高山看護学校閉校記念誌より卒業生の言葉一部抜粋～



入学して間もない1年生の夏休み、課題の多さに心が折れそうになりましたが、仲間との励まし合いで乗り越えた時間が今も大切な思い出です。～中略～

母校の閉校を知り、胸に込み上げるものがありました。あの校舎、先生方の言葉、仲間との日々がもう新しい世代に引き継がれないと寂しさを感じます。しかし、多くの医療従事者を送り出してきた歴史と想いは、決して消えることはありません。私にとってこの学校は、夢を形にしてくれた大切な場所です。閉校という節目を迎える今、心から「ありがとうございました。」と感謝を伝えたいです。

今、この学校に関わる者として、この卒業生の文章を読み、あらためて高山准看護学校が果たしてきた役割、そして学んだ学生、それに関わった教職員の皆さんにとってかけがえのない誇れる学校であったことを実感しました。素敵な言葉をありがとうございました。